

東海道五十三次を往く

第28回

御油宿

「東海道中膝栗毛」にも描かれた圧巻の松並木

東海道と姫街道が合流する追分の宿。国の天然記念物に指定された600mに及ぶ御油ノ松並木を有し、江戸時代からの歴史が作り上げた圧巻の風景を見せる。多い時には本陣が4軒、旅籠が62軒も立ち並び大いにぎわい、飯盛女たちは旅人を相手に、半ば強引なまでの客引きをしたそう。浮世絵師・歌川広重の絵には、首にかけた荷物を女にくっつかまされる旅人の、苦しそうな表情がユーモラスに描かれている。



広重が描いた風景に似た御油宿の夕景。絵にある格子の建物は残っていないものの、街道沿いのそこそこに往時の風情を感じる。



宿場の風景

音羽川にかかる御油橋(上)を渡るとまもなく御油宿。街並みに、当時数多く立ち並んでいた旅籠の名残と思われる、連子格子の古い家屋を見ることができる(右)。



大社神社



姫街道との追分

一里塚

三河国府総鎮守である大社神社(右上)の長い白壁に沿って旧東海道を進み、一里塚(上)を経ると、姫街道との追分へ。秋葉常夜灯と道標が立っている(右)。

かつては歓楽街としても名高く、多くの旅人でにぎわった御油宿。今はすっかり落ち着いた現代の街並みに残る、歴史の跡を辿った。



本陣跡 / イチビキ第一工場

味噌文化が根付く愛知で、約100年にわたり味噌・醤油の製造販売を行う「イチビキ」の工場。香ばしい醤油の香りに思わず食欲をそそられる。白い外壁の傍には、本陣跡の石碑が残る。



東林寺

御油宿が栄えたときに身投げした飯盛女の墓が並び、にぎわいの影にあった女性たちの悲哀もまた歴史の跡として残されている。



御油ノ松並木

強い日差しや風から旅人たちを守った松並木。江戸幕府が開かれた直後の1604(慶長9)年に、幕府の道路政策として奉行の大久保長安が植樹。1802(享和2)年に刊行された十返舎一九の「東海道中膝栗毛」では、主人公の喜多八と弥次郎兵衛が飯盛女に「キツネが出る」と脅かされた並木として登場する。

